

# 養豚業と家畜商で 年商26億円を稼ぐ 女性経営者



## 養豚業と家畜商で年商26億円を稼ぐ女性経営者

今回の主人公は、熊本県内で企業養豚を展開するセブンフーズ(株)代表の前田佳良子。2006年から急速に規模拡大を進め、年間出荷頭数5万頭、年商16億円を超える一大農業法人に成長させた。同時に家畜商となりわいとする(株)セブンワークスの代表も務め、グループ両社で26億円を売り上げるやり手の女性経営者である。

文・写真／窪田新之助、写真提供／セブンフーズ(株)

### 家畜商として養豚業界へ

JRの熊本駅と大分駅を結ぶ豊肥本線の肥後大津駅から車で北に向かうことおよそ20分。山道に差しかかってきたな、と思い始めたところに豚舎が見えてきた。

その入口付近にある一軒家のような事務所の玄関で出迎えてくれた女性経営者は、凛としていて、隙がない雰囲気を持っていた。ただ、取材を始めるとすぐに笑顔を見せながら打ち解けて話をしてくれたので安心した。最初に感じた印象は、畜産業界という男の世界で生きてきた証なのだろう。経歴を聞くにつれ、そう思ふようになった。

前田は大学卒業後にレストランチェーンで栄養士になつたものの、3年後に脱サラして転身したのは家畜商だった。家畜商というのは牛と豚、馬、めん羊、山羊の売買人のことである。

前田がその世界に入ったのは父親の影響が大きい。父親の合志一也は九州では名うての家畜商だった。大

手肉卸のステーゼン(株)には九州管内で唯一専属契約をするほど認められていた人物である。それだけに相当

の頭数をさばいていたわけだ。前田も18歳で大学に入学すると同時にその仕事を手伝うことになった。

「学校に行くために家を出ると、毎朝、目の前にトラックの2t車が付けてあるんです。荷台に積んであるのは10匹ぐらいの豚。父親が早朝に仕入れてきたんですね。それで私は

トラックに乗つて南熊本の屠畜場に運び、豚を卸していく。大学はそこから歩いていける距離にありましたから、トラックはそのまま置いておき、学校が終わったら屠畜場に戻つて家まで運転して帰っていました」

「毎朝」というのは決して誇張ではない。試験があるうが同級生との旅行があるうが、あるいは謝恩会の日でさえも日課は日課であつたといふ。

「何しろ謝恩会の日に私は白の振袖姿で屠畜場に向かいましたから(笑)。さすがにその格好で荷卸しきれないでの、場内にいる人たちに

缶コーヒーをおごつて代わりにやつてもらいましたけど。その後に謝恩会の会場にタクシーで向かいましたよ」

こうした話を届託なく話すことでもわかるように、前田にはその手伝いが嫌だとか、辛いとか、恥ずかしいとかいう気持ちはなかつたそうだ。

「父からもらうアルバイト代も良かったですしね。また、そのトラックで同級生を実家の天草まで送つて待ち合わせて日帰り旅行をしたりいったり、同級生たちと屠畜場の前で待ち合わせて日帰り旅行をしたりと、楽しく過ごしていました」

### わき出した事業意欲

このころ、前田の心にはすでに事業に対する意欲がわいていたようだ。毎日のようにトラックを運転し、車窓から街の様子を眺めながら、時にこんな計算をすることがあつた。たとえば、建つばかりのビルを見かけたとする。ファッショビルでも飲食店ビルでもなんでもいい。とにかく新築の建物を見つけると頭は急に回転を始め、その建築費用や耐震強度、出店した場合の売り上げなどを割りり出していくのだった。

「やはり私は父の血を引いているんだと思います。学生のころから專業主婦へのあこがれはありませんでした



## セブンフーズ株式会社 代表取締役 前田佳良子

熊本県菊池市

まえだ・かよこ 1960年、熊本県大津町生まれ。尚絅大学短期大学卒業後、合志畜産(現セブンフーズ)入社。2004年、代表取締役に就任。熊本県農業法人協会副会長、熊本県指導農業士。

た。いつも考えていたのは、どうし

たら人様に迷惑をかけないで生きられるか、それからどんなことにチャレンジできるかといったこと。これはもう性分ですね」

大学で栄養士科を選び、栄養士の資格を取つたのも、「病院やレストランでいくらでも仕事がある」と思ったからだ。同じく手に職を持つ理由から小型から大型までのトラックの運転免許や簿記2級の資格も取得している。

ただ、栄養士の仕事は3年で辞めた。父と同じ家畜商になるためだ。当然ながら周囲には反対された。

「畜産業界は女では無理だと散々言われました。もう会社を辞めてしまった後には、事務職を探して結婚をする準備をしろとも」

前田はそうした反応を冷静に受け止めながらも、どうしたらこの世界で生きていけるかを考え続けた。やがて出した結論は、男の何倍も努力して認めてもらうことだった。

「女は腰掛にしか見てもらえないとでも仕方ないと思つんです。結婚となれば相手に合わせざるを得ない。男性は女性と仕事をする際にそういうリスクを見ていますよね。だから思つたんです。普通に仕事をしてい

だろう、男性の3倍は努力しないと

いけないって」

その覚悟は本物だった。前田は畜商としてだんだんと頭角を現していく。それを商売とするセブンワーランでいくらでも仕事がある」とりしてからは10万頭へと急増した。

8500頭だったが、前田に代替わ

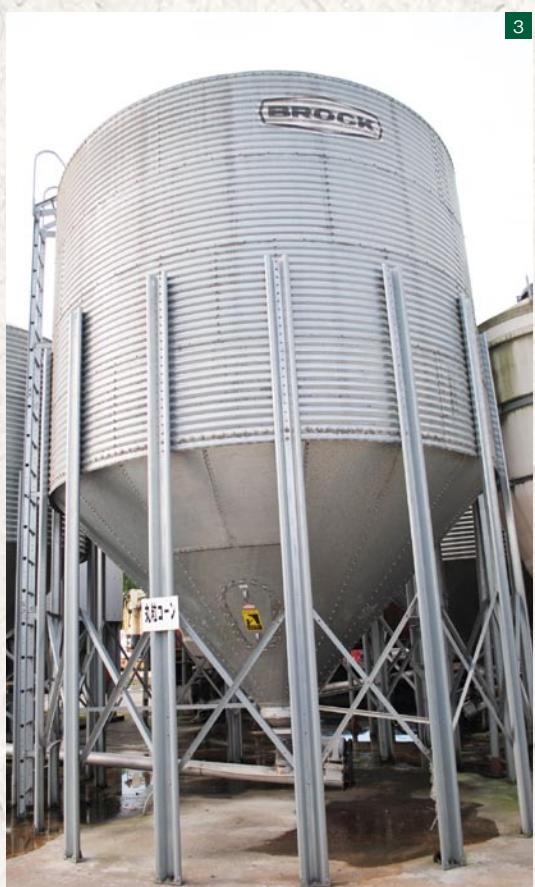
## 危機感から養豚業へ

06年、前田はそれまで母親が担当してきた養豚業を専門とするセブンフレーズの経営にも乗り出す。その理由を尋ねると、「危機感ですね」と言う。前田が畜産業界に入ったころ、熊本県内には牛と豚を合わせて約100人の畜商がいた。それが現在では10人前後までに減っているそうだ。

「2000年に入つてからの流通革

命で、家畜商のような中間業者はいずれなくなるかも知れないという危機感を持つようになりました。どんな商売も下駄屋と同じ、いつまでも続かない。下駄屋が靴屋に変わったように、家畜商で食べていけるうちにもう一つ経営の柱を作ろうと決めたんです」

前田が母親から養豚業を継いでから、セブンフレーズは一気に大規模化路線へと舵を切つた。初年となる06年には常時飼養頭数を600頭から1200頭に拡大。さらに、08年度



1 セブンフレーズの農場の一つ。  
2 堆肥舎。  
3 農場内にある飼料タンク。

## 養豚業と家畜商で年商26億円を稼ぐ女性経営者



4 母豚の管理システム。

5 自動で昇降する分娩ゲージ。授乳時には赤い部分に母豚が寝転がり、その脇の緑の部分に子豚がいる。母豚が立ち上がるとき、その上にあるレバーに当たって反応し、床の赤い部分だけが自動で持ち上がるようになっている。

6 「オートソーティングシステム」。広場から餌のある部屋へ移動する際、豚は必ずこの装置を通る。ここで自動的に体重を量る。



4



5

からの5年間で20倍に増頭した。現在は熊本県内に所有する六つの農場で2万5000頭を飼っている。すべて繁殖から肥育までの一貫経営である。

### 動物福祉の考え方

家畜商という男の世界で長年やってきたものの、経営の内容を見ればやはり女性らしい。その最たるものには経営の三本柱の一つである動物福祉の実践。たとえば、妊娠中の母豚を狭い檻に入れることなく自由に歩き回らせるフリーストールを導入している。実際、2人の息子を出産した前田にとって、妊娠中の母豚にストレスをかけることはとても耐えられなかつた。広い部屋の中で群れになっていても各個体を識別できるよう、1頭ずつの耳にはICタグを付けている。

分娩ゲージは自動で昇降する。母豚による子豚の圧死を防ぐためだ。通常のゲージでは出産後、授乳時に母豚が立ち上がってすぐに屈んだ際、下にいる子豚を押しつぶして窒息死させる事故が頻発している。昇降式では母豚が立ち上がると、母豚が横たわっている床だけが30cmほど持ち上がり、子豚がいる床と高さ差をもつて隔離される。導入前には5%あつた圧死率は導入後にはほとん

### 出荷適期の肉豚を自動選別するシステム

ゼロになった。

六つある農場の一つである旭志農場では、豚250頭を放し飼いの広い部屋から給餌する部屋に移動させる途中で、自動的に体重を計測する「オートソーティングシステム」を導入している。このシステムは豚1頭だけが通れる大きさで、床は体重計である。豚は毎日三食以上を食べるための移動の際にはこの装置を必ず通る。この装置で顧客の要望する体重を設定すると、豚が乗った際に自動で体重を量る。もし出荷に適した体重であれば、箱の中の出荷部屋に向かう扉だけが開く。逆であれば、給餌の部屋に通じる扉だけが開く。250頭の中から顧客が望む体重の豚を探し、その豚だけを別の部屋に追い込むのは従業員にとって負担のかかる作業である。さらに、従業員に追いかけ回される豚にとつてもストレスになる。それは結果的に肉質を落とす。

### 周辺環境への配慮

二本目の柱は自然・生活環境への配慮。各養豚場の周辺には住宅やホタルの生息地がある。家畜糞尿の臭気を外部に漏らさないよう、ほとん

どの畜舎で発酵床を採用している。発酵床というのは、おがくすともみがらに好気性細菌を混ぜて発酵させたもので、豚の排せつ物を分解する過程で臭いを抑える。

## エコフィードと飼料設計

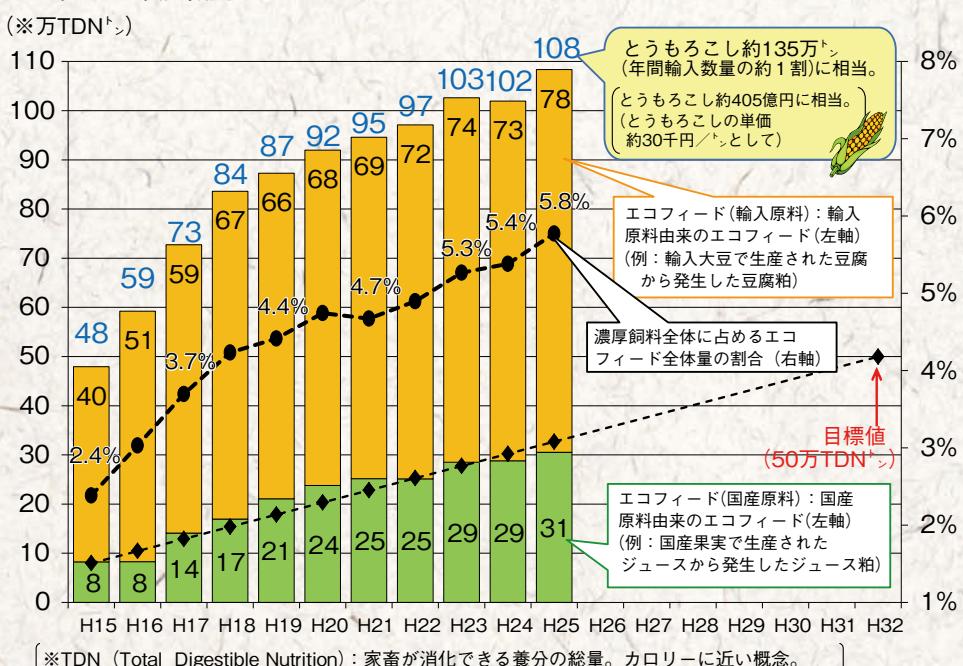
三本目の柱は食品残さから飼料（エコフィード）を製造することで、08年に着手した。パンや菓子、麺、豆乳、焼酎かす、アイスクリームなどを原料に液体の飼料（リキッドフィーディング）を自社で造っている。その製造工場に行つてみると、アイスクリームのタンクから甘酸っぱいにおいが立ち込めている。工場の中には小麦粉の袋や麺類の袋が山積みになっていた。

エコフィードを始めたのは飼料の高騰に対応するためだ。農林水産省が8月に作成した資料「エコフィードをめぐる情勢」によると、リキッドフィーディングの販売価格の全国平均はキロ5・7円。セブンフレーズの製造原価は「企業秘密」というので明かせないが、自社製造したものを使つているため、その価格はおおむね想像できるだろう。

エコフィードで固体ではなく液体を選んだのは豚の嗜好性や消化の良さからだ。

原料の調達や製造の過程は次のよ

エコフィードの製造数量



(※TDN (Total Digestible Nutrition) : 家畜が消化できる養分の総量。カロリーに近い概念。)

エコフィード製造事業所の数

飼料化の手法	価格 (円/kg)
乾燥飼料	24.5
サイレージ	27.4
リキッド飼料	5.7

食品 製造 副 產 物	エコフィード原料	事業所数
	酒粕類 (焼酎粕、ビール粕等)	35
	糟糠類 (豆腐粕、醤油粕等)	37
	農産物加工残さ (馬鈴薯屑、ジュース粕等)	32
	パン屑、菓子屑等	45
	その他 (複数混合)	84
	余剰食品 (売れ残り食品、厨芥類等)	46
	動物性原料 (魚粉等)	19
	合計	298

出典：農林水産省の資料

うな仕組みになる。食品残さは、その収集と運搬に関する資格を持つセブンフーズが西日本12府県の冷凍食品工場から回収する。その後、セブンフーズの産業廃棄物の中間処理施設でリキッドフィーディングに変

える。それを与えた豚の糞尿は発酵床で微生物によって分解される。その発酵床は1年以上使つたら堆肥にして、自社で所有する10haのキヤベツ畑で再利用する。収穫したキヤベツは冷凍食品会社に出荷し、ギョーザ

## 養豚業と畜産商で年商26億円を稼ぐ女性経営者



7 セブンフーズのキャベツ畑。自社で製造した堆肥を入れている。

8 「あそび豚」。ふかふかの発酵床で育っている。

の原料になる。その加工の過程で除去した外葉や芯はまた液体飼料の原料にする。こうした資源循環の仕組みを築いているのだ。

食品残さの提供元は65社、月間の取扱量は1300t。農業法人でこれだけの量のエコファームを自社製造している養豚業者は全国でも数少ない。

いまでは配合飼料の最大40%をエコファームに置き換えるようになつた。同じ目的で飼料用米についても県内外26戸の農家と48haで契約栽培している。

エコファームの製造にあたつては、各個体の生育ステージや豚舎の外気温に合わせ、最適な飼料設計をしている。エコファームを与えた豚の肉は霜降りが入りやすく、味もおいしい。

### 【あそび豚】と【未来村とん】

こうした環境で育てた肉豚で二つのブランドをつくった。出荷量の95%を占めるのはハイポー種の「あそび豚」。「あそび」は広い豚房で自由に遊び回る様子に加え、農場から眺められる「阿蘇山」から命名した。

もう一つのブランドはケンボロー種の「未来村とん」で、近隣の養豚農家4戸で結成した熊本未来会の共同ブランド。両ブランドとも大手食肉

卸スター賞を通して全国に販売している。

### 地域社会の理解あつての事業

ところで、二本目の柱である「自然・生活環境への配慮」についてはあつさり書いてしまつたが、これがセブンフーズの組織運営にとつては最も重要なのだろう。

畜産業者が規模拡大するにあたつて厄介なのは用地確保である。

前田も規模を広げる際、建設業者に設計図や見積書の作成を依頼した。しかし、なかなか請け負ってくれない。

後で聞いたところによると、その業者は「規模拡大なんて無理」と関係業者への営業をしていなかつたそうだ。また、地元の地権者らを対象に事業の説明会を開き続けたが、最初の3年間は1坪も購入することができなかつた。こうした経験から前田は地域社会あつての畜産業であることに気づいたのだ。

**若い人材の育成**

取材を終えてから数日後、前田から一通のメールが届いた。そこには言い忘れた話として、両親に対する感謝の気持ちがつづっていた。養豚業の拡大にあたつて苦労する前田を励ましながら、その成功を見届けることなく9年前に亡くなつた父。

両親への感謝、地域社会への感謝。前田はそうした思いを胸に、これからセブンフーズを社会に一層貢献できる会社にしていくつもりでいる。

いま取りかかっているのは養豚業界で活躍する若い人材の育成である。8年前からの規模拡大に伴い、毎年6~14人の若い人材を雇つてきた。社員50人の平均年齢は28歳。ホームページでは「今月のスタッフ紹介」というコーナーを設け、一人ひとりの担当や趣味、会社を志望した理由や仕事のやりがいなどを紹介している。若い人たちに期待するのは次のような理由からだ。

「周りを見渡したときに、農業界では担うべき世代の人材が空洞化していることに気づいたんです。誰かが若い人たちを育成して、日本の農業を守つていかなければいけません。それだったら私がやろうと思いまし。うちで育つた若い人たちには社会に貢献できる人材になつてほしいですね」

大学を卒業してから事あるごとに取りかかるべき事業を見つけてきた前田は、また新しく達成すべきことを探し出したようだ。（文中敬称略）